

氏 名	GONZALEZ MARQUEZ, Silvia Luz ゴンサレス マルケス シルビア ルース
学 位 の 種 類	博 士 (学術)
学 位 記 番 号	甲 第 249 号
学位授与年月日	2025年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学 位 論 文 題 目	Subaltern Christianity The Mutual Reshaping of Indigeneity and Protestantism サバルタンキリスト教 先住民とプロテスタント教会の相互関係と変容
論文審査委員	主 査 教 授 シャーニー, ジョージアンドレア 副 査 准教授(新職階制度) サルトン, ヘルマン 副 査 准教授(新職階制度) ブラウン, ベルナルド エンリケ 副 査 ICU 名誉教授 マラーニー, ショウン K.

論文内容の要旨

この論文はサバルタンキリスト教を紹介する。ここでは、サバルタンの主体が先住民の宇宙論を通してキリストを体験し、聖書研究を通じて、先住民の土着性を受け入れながら信仰を脱植民地化するものである。本稿は、メキシコの先住民プロテスタントの事例研究に焦点を当て、世界中で過小報告されているキリスト教徒迫害の現象に焦点をあてる(Phillpott & Shah, 2018)。この研究では、学際的なアプローチを通して、平和研究、人類学、および批判的人種理論を活用して、植民地時代の根源と、特に先住民プロテスタントが経験した宗教的不寛容の現代的兆候を探究する。存在論的安全保障を統合する植民地時代以降の人間の安全保障の枠組み (Shani, 2017) を利用することにより、先住民コミュニティにおける紛争と改宗の感情的および実存的側面を浮き彫りにする (Kinnvall, 2004)。この論文では 3 つの研究課題を対象とする、すなわち、サバルタンキリスト教とは何か? チアパス州の先住民コミュニティにおける改宗と人間の安定感や不安定感との関係は何か?植民地時代以降の現在、なぜ先住民はプロテスタントに改宗するのか?

理論的枠組みと文献再検証では、サバルタンキリスト教の概念を紹介するために学術的および現地の情報源を組み込んだ。Antonio Gramsci と Gayatri Spivak らの成果に基づいて、先住民プロテスタントを、覇権主義的なカトリックの伝統の外で信仰を実

践する疎外された主体として位置づけた。この視点は、ソーシャル メディア プラットフォーム、芸術、詩、刺繍を通じて表現される先住民族の見解の分析によってさらに強化される。信仰の感情的および関係的側面、アイデンティティおよび迫害を探究するために、存在論的安全保障を含む広範な人間の安全保障アプローチを適用した。脱植民地主義的なアプローチを用いてプロテスタント教義の変容を解き明かし、非西洋的文脈におけるプロテスタントの土着化を強調する。この研究では、改宗とは、段階的な変化のプロセスまたは根本的な決裂を伴う複雑な現象として探索する

(Cannell, 2006; Rambo, 1993; Robbins & Engelke, 2010)。本稿では、「退屈なほど馴染み深い」というキリスト教に対する否定的な見方を批判し、先住民の解釈や信仰の生きた経験を尊重する微妙な視点を提唱し (Parsons, 2022; Pollock, 1996)、改宗を状況に応じたものとしてとらえるのではなく、多面的で個人的なものとして示す。

この論文の方法論は、研究対象のコミュニティとの倫理的で敬意を持った関わりを確保するために、先住民による学術報告に基づいたアプローチを適用した (Smith, 2021; Younging, 2018; Wilson, 2008)。データ収集には、10 年以上かけて段階的に、誠実に、慎重にグループとの信頼を構築することが必要であった。45 を超える証言、すなわち、迫害の中での改宗体験と忍耐を語る先住民プロテスタントの物語を集めた。補完的な手法には、プロテスタントの牧師、カトリックの聖職者、人権活動家、地元ジャーナリストなどの主要な関係者への綿密なインタビューと、メキシコとチアパスに関する歴史的および現代の文献の広範な検証を含めた (Rivera, 2014, 2019)。関係性の互惠性に基づいたこれらの定性的方法は、先住民コミュニティにおける信仰、アイデンティティ、安全の間の複雑な関係についての幅広い理解を促進するものとなった。

実例研究では、水、避難所、基本的なサービスへのアクセスの拒否や、追放や身体的暴行などの直接的な暴力行為など、宗教的不寛容がどのように現れるかを特定する

(CNDH, 2016; Rivera, 2014)。これらの慣行は政府の無策または共謀によって悪化し、疎外と無視の悪循環を永続させる (Mundaca, 2023)。これらの課題にもかかわらず、先住民プロテスタントは信仰に頼って自分たちの主体性と尊厳を取り戻し、自分たちの苦しみをより広範な霊的な語りの中での一時的な試練と見なしている。

調査結果は、チアパス州の宗教的不寛容には植民地時代に深い根源があり、国家の共謀と地元の力関係を通じて続いていることを明らかにした (Greenleaf, 1981; Delgado & Stefancic, 2017)。先住民プロテスタントは、地方自治体の支援を受けているカトリック多数派グループによる暴力、社会的排除、強制移住に絶えず晒されている (CNDH, 2016; Rivera, 2005)。これらの行為は、単に物質的な対立の表現であるだけでなく、プロテスタントへの改宗を共同体の結束とその神聖な秩序に対する脅威と見なすカトリック伝統主義者の深刻な存在論的不安感を反映している (Kinnvall, 2004)。先住民プ

ロテスタントにとって、改宗は主体性と抵抗を示す極めて個人的な行為として現れ、物質的および実存的脅威の中で存在論的な安全を提供する（Giddens, 1991; Scott, 2008）。本稿は、国家がメキシコ人のアイデンティティとカトリックに表現された伝統の保護を主張することによって、宗教的少数派に対する人間の不安感を永続させる役割を果たしたと論ずる。さらに、メキシコの先住民コミュニティにおけるプロテスタント信者の拡大は、米国の利益にかなう植民地拡大の成功、地方地域の不安定化、そして伝統の破壊の兆候として広く見なされている（Fabregas, 1991; Frayba, 1996; Rivera, 2005）。しかし、これらの主張は個々の改宗者の主体性を否定している。調査結果は、外国人宣教師ではなく、先住民族が彼ら自身のコミュニティに福音を伝える主な集団であることを示した。先住民性とプロテスタントの教義の相互変容が示される。チアパス州の先住民族は、奇跡的な癒しや夢の中での啓示を強く受けるなど、先住民族の土着性を通じてプロテスタントの信仰を生きている。同時に、改宗者の土着性は、聖書の研究と母国語での解釈を通じて再形成され、彼らの関係性が再定義されている（Trowsell et al., 2022）。

この研究の意義は、サバルタン集団の生きた経験と主観に焦点を当てた植民地時代以降の枠組みを前進させることにより、平和研究と人間の安全保障の分野に貢献することである。本稿は、単に物理的な保護だけでは不十分であることを強調し、代わりに人類の宗教的および文化的側面に取り組む安全保障の枠組みを提唱している（Shani, 2017; Richmond, 2019）。本稿は、政策立案者にとって、信教の自由を保護し、不寛容を永続させる組織的な偏見に対処する必要性についての実用的な洞察を提供する。提案としては、宗教間の対話と理解を育みながら疎外されたグループに力を与える包括的な法的枠組みの開発や参加型の政策介入が含まれる。

結論として、本稿は、先住民プロテスタントの声を中心に据えることで、先住民のアイデンティティを均質化するという植民地時代の説明を激変させるだけでなく、改宗と主体性の性質についての仮説にも異議を唱えるものである。本稿は、感情のおよび文化的側面を組み込んだ人間の安全保障の再考を求め、多文化社会におけるアイデンティティ、宗教、安全保障の複雑な相関関係に対処する方法を提示する。この取り組みは最終的に、宗教の自由の擁護に貢献することと、相互尊重と正義の枠組みの中で多様な宗教的表現が共存する多元的で包括的な未来を構想するものである。

論文審査結果の要旨

委員会は満場一致で、この学位論文が平和研究の博士号授与に必要な基準を満たしているとの結論に達した。本論文は平和研究の分野において、存在論的、方法論的、理論的に顕著に貢献するものである。

まず、人類学、宗教学、国際関係学を駆使した学際的アプローチを採用することで、本論文は学問分野としての平和研究を再考することに貢献している。統治国家の存在に基づく国際秩序の維持や、(物理的・直接的暴力の不在という)消極的平和と(構造的暴力の除去という)積極的平和(Galtung 1969)のあいだの二元論的区分を前提とし、平和研究を国際関係学の下位分野とみなす、優勢的な存在論(Hinton et al. 2019を参照)に対して、本論文は、サバルタンの人びとの生きた経験と主観に焦点を当て、ポストコロニアルな枠組みを推進することによって挑戦した。

第二に、本論文は、メキシコ・チアパス州の先住民プロテスタントにおける広範なフィールドワークに基づいている。特筆すべきは、テストimoniオス(*testimonios*)—プロテスタントへの改宗についての、そしてコミュニティ内、またチアパス州の覇権的な権力構造の中で直面する困難についての、先住民たちの語り—を方法論的ツールとして用い、脱植民地主義的方法論(Smith 2021; Younging 2018; Wilson 2008)の発展に貢献している点である。主要な関係者への半構造的インタビューを補うかたちで、テストimoniオスを用いることは、先住民プロテスタントというサバルタンの人びとに声を与え、本論文を内容的に豊かにした。また方法論的にも画期的であった。

最後に、本論文はサバルタン・クリスチャニティという概念を導入し定義することで、重要な理論的貢献を果たし、さらにスピヴァク(1988)への反論として、サバルタンは「語れる」と主張した。サバルタン・クリスチャニティは、イエス・キリストへの信仰を、先住民の宇宙論の内側で再解釈する。それはまた、先住民自身の言語による脱植民地主義的な聖書研究を通して、伝統的慣習と癒しを融合させる。その結果、サバルタン・クリスチャンたちは、優勢な宗教集団によって構造的に周辺化させられているにも拘わらず、福音を分かち合う者として、また地域に変化をもたらす主体としてそこにいる。本論文は、先住民がプロテスタントに改宗する理由を検討し、4つの主要なテーゼを提示した：1) 奇跡的な癒しや病への慰めが得られたから、2) 夢の中で啓示を受けたから、3) 家族の中に劇的な変化を見たから、そして最後に4) 神に試練を与えたから、である。言い換えれば、本論文は先住民を表象しようとしているのではなく、テストimoniオスを通して先住民の声を捉えようとしているのである。

しかし委員会からは、論文の微調整、校正、一部の理論的概念の明確化が必要であるとの指摘があった。特に、プロテスタントに改宗した先住民が行使する主体性の、何が

サバルタンのなのかが明瞭でない。候補者は、先住民のプロテスタントへの改宗という行為を、脱植民地主義的な枠組みを通して見ることを選んでいるが、主体性の概念を用い、これを展開させる時、この枠組みから外れているように見える。言い換えれば、理論的な枠組みと、脱植民地主義的方法論の両方に対してより批判的な省察があれば、本論文はより説得力の高いものになっただろう。

また、プロテスタントへの改宗者である候補者自身の立場について、よりニュアンスのある考察を加えることで、説得力が増しただろうとの提案もなされた。候補者は、序文ではたしかに自身のポジショナリティを論じているが、自身が先住民でないにも拘わらず、ときに先住民プロテスタントに代わって語ろうとしているように見える。さらに、もし本論文を一冊の著書として出版するなら、革命後のメキシコ国家とカトリックの関係について、より持続的な歴史的考察を加えることが必要である。だが、それにはおそらく新たに一章を書き加えねばならないため、ポストドクトラル研究として行うのが賢明だろう。

委員会は、本論文に修正なしで博士号を与えることに満場一致で合意したが、評価として A を与えるか、B を与えるかについては意見が分かれた。最終的には B を与えることを決定した。結論として、委員は全員一致で、本論文の理論的かつ実証的な豊潤さを認め、博士号を授与することに合意した。

Summary of the Dissertation

This thesis introduces Subaltern Christianity, where subaltern agents experience Christ through their Indigenous cosmologies and, via Bible study, decolonize their faith while embracing their indigeneity. It addresses the underreported phenomenon of Christian persecution worldwide (Philpott & Shah, 2018), focusing on the case study of Indigenous Protestants in Mexico. Through an interdisciplinary approach, the research engages Peace Studies, Anthropology, and Critical Race Theory to explore the colonial roots and contemporary manifestations of religious intolerance, particularly as experienced by Indigenous Protestants. By utilizing a postcolonial human security framework that integrates ontological security (Shani, 2017), it highlights the emotional and existential dimensions of conflict and conversion in Indigenous communities (Kinnvall, 2004). This dissertation addresses three research questions: *What is Subaltern Christianity? What is the relationship between conversion and human (in)security in Indigenous communities of Chiapas? Why do Indigenous People convert to Protestantism in present postcolonial times?*

The **Theoretical Framework and Literature Review** incorporates academic and vernacular sources to introduce the concept of Subaltern Christianity. Drawing on the works of Antonio Gramsci and Gayatri Spivak, it positions Indigenous Protestants as marginalized agents practicing faith outside hegemonic Catholic traditions. This perspective is further enriched by an analysis of Indigenous people's views, as expressed through their social media platforms, art, poetry, and embroidery. A broad human security approach, including ontological security, is applied to explore the emotional and relational aspects of faith, identity, and persecution. Drawing from decolonial approaches it unravels the transformation of Protestantism, emphasizing its indigenization in non-Western contexts. This research explores conversion as a complex phenomenon framed as either a gradual process of change or a radical rupture (Cannell, 2006; Rambo, 1993; Robbins & Engelke, 2010). It critiques dismissive views of Christianity as "tediously familiar" and advocates for nuanced perspectives that respect Indigenous interpretations and lived experiences of faith (Parsons, 2022; Pollock, 1996); showing conversion, instead as contextual, multifaceted, and deeply personal.

The **Methodology** of this dissertation applies relational approaches, drawing from Indigenous scholarship to ensure an ethical, respectful engagement with the studied communities (Smith, 2021; Younging, 2018; Wilson, 2008). Data collection required over a decade of gradual, honest, and careful building of trust with the groups. Collecting over 45 *testimonios*—narrative accounts of Indigenous Protestants recounting their

conversion experiences and endurance amidst persecution. Complementary methods included in-depth interviews with key stakeholders such as Protestant pastors, Catholic clergy, human rights advocates, and local journalists, alongside an extensive review of historical and contemporary literature on Mexico and Chiapas (Rivera, 2014, 2019). These qualitative methods, grounded in relational reciprocity, facilitated a broad understanding of the complex connection between faith, identity, and security in Indigenous communities.

The **Case Study** identifies the ways religious intolerance manifests, including the denial of access to water, shelter, and basic services, as well as direct acts of violence such as expulsions and physical assault (CNDH, 2016; Rivera, 2014). These practices are exacerbated by governmental inaction or complicity, which perpetuates a cycle of marginalization and neglect (Mundaca, 2023). Despite these challenges, Indigenous Protestants rely on their faith to reclaim their agency and dignity, seeing their suffering as a temporal trial within a broader spiritual narrative.

Findings reveal that religious intolerance in Chiapas has deep colonial roots, perpetuated through state complicity and local power dynamics (Greenleaf, 1981; Delgado & Stefancic, 2017). Indigenous Protestants are persistently subjected to violence, social exclusion, and forced displacement by Catholic majority groups, often with support from local authorities (CNDH, 2016; Rivera, 2005). These acts are not merely expressions of material conflict but also reflect profound ontological insecurity among Catholic traditionalists, who perceive Protestant conversions as threats to communal cohesion and their sacred order (Kinnvall, 2004). For Indigenous Protestants, conversion emerges as a deeply personal act of agency and resilience, offering ontological security amidst material and existential threats (Giddens, 1991; Scott, 2008). This dissertation argues that the state, alleging protection of Mexican identity and tradition expressed in Catholicism, played a role in perpetuating human insecurity for religious minorities. Furthermore, the expansion of Protestantism in Indigenous communities in Mexico is widely seen as a sign of successful colonial expansion serving US interests, destabilizing local regions, and destroying tradition (Fabregas, 1991; Frayba, 1996; Rivera, 2005). Nevertheless, these claims deny individual converts' agency. Findings show that Indigenous People, not foreign missionaries, are the main collective evangelizing their communities. It shows a reciprocal transformation of indigeneity and Protestantism. Indigenous peoples in Chiapas live out their Protestant faith through their indigeneity, with miraculous healing and revelation in dreams strongly present. Simultaneously, converts' indigeneity is reshaped through Bible study and interpretation in their native language, redefining their relationality (Trowsell et al., 2022)

The **Significance** of this research contributes to the fields of Peace Studies and Human Security by advancing a postcolonial framework that focuses on the lived experiences and subjectivities of subaltern groups. It highlights the inadequacy of merely physical protections, advocating instead for security frameworks that address the religious and cultural dimensions of humanity (Shani, 2017; Richmond, 2019). For policymakers, this dissertation offers actionable insights into the necessity of protecting religious freedoms and addressing systemic biases that perpetuate intolerance. Recommendations include the development of inclusive legal frameworks and participatory policy interventions that empower marginalized groups while nurturing interreligious dialogue and understanding.

In **Conclusion**, by centering the voices of Indigenous Protestants, this dissertation not only disrupts colonial narratives that homogenize Indigenous identities but also challenges assumptions about the nature of religious conversion and agency. It calls for a rethinking of human security that incorporates emotional and cultural dimensions, presenting a way to address the complex correlation of identity, religion, and security in multicultural societies. This work ultimately envisions contributing to religious freedom advocacy, and a pluralistic and inclusive future, where diverse religious expressions coexist within a framework of mutual respect and justice.

Summary of the Dissertation Evaluation

The committee was unanimous in their decision that the dissertation met the standard required to be awarded a doctorate of philosophy in Peace Studies. It made a significant contribution to the field of Peace Studies ontologically, methodologically and theoretically.

First, in employing an interdisciplinary approach drawing on Anthropology, Religion and International Relations, it contributed to *rethinking* Peace Studies as an academic field of study. By advancing a postcolonial framework that focuses on the lived experiences and subjectivities of subaltern groups, it challenged the dominant *ontology* of Peace Studies as a subdiscipline of international relations (c.f. Hinton et al. 2019) premised on the maintenance of an international order based on the existence of sovereign states and the binary distinction between negative peace based on the absence of physical or direct violence and positive peace as the elimination of structural violence (Galtung 1969).

Second, the dissertation was based on extensive fieldwork among Indigenous Protestants in Chiapas, Mexico. Of particular note was the use of *testimonios*—narrative accounts of the conversion of Indigenous peoples to Protestantism and the difficulties they face both within their communities and in their relationship with hegemonic power structures in Chiapas—as a methodological tool contributing to the development of a decolonial methodology (Smith, 2021; Younging, 2018; Wilson, 2008). Complementing semi-structured interviews with key stakeholders, the use of *testimonios* enriched the dissertation giving voice to the subaltern groups of indigenous Protestants and was methodologically innovative.

Finally, the dissertation made a significant *theoretical* contribution in introducing and defining the concept of Subaltern Christianity and arguing, contra Spivak (1988) that they could “speak.” Subaltern Christianity reinterprets faith in Jesus Christ *within* Indigenous cosmologies, merging traditional practices and healing through decolonized Bible study in their native languages. Consequently, subaltern Christians participate as gospel sharers and agents for local change, despite systemic marginalization by dominant religious groups. The dissertation examined the reasons Indigenous People give to explain why they converted to Protestantism and advanced four main theses: 1) that it provided miraculous healing or comfort in sickness; 2) revelation in dreams; 3) because they saw a drastic positive change in a family member; and finally 4) they put God to the test. In other words, the dissertation attempted not to *represent* Indigenous Peoples but to capture their voices through *testimonios*.

The committee did, however, suggest that the dissertation would benefit from fine tuning, copy-editing and a clarification of some of the theoretical concepts utilised. In particular, it was not clear what was subaltern about the agency practiced by indigenous peoples in converting to Protestantism. The candidate’s deployment of the use of agency seemed out of keeping with the decolonial framework through which she chose to view the conversion practices of Indigenous Protestants. In other words, a more *critical* reflection on both her theoretical framework and decolonial methodology may have further strengthened the dissertation.

It was also suggested that a more nuanced reflection on the candidate's own positionality as a convert to Protestantism may help strengthen her argument. The candidate did discuss her own positionality in the preface but appears at times to speak *for* Indigenous Protestants despite not being indigenous herself. Furthermore, a more sustained historical engagement with the relationship between the post-revolutionary Mexican state and Catholicism is needed if the manuscript was to be published as a book

but this would best be left to a postdoctoral project since it may necessitate the addition of another chapter.

The committee agreed that no revisions were needed for the dissertation to be awarded a PhD and were torn on whether to award it an A or B grade. In the end, we decided to award it a B grade. In conclusion, all committee members unanimously agreed that the degree of doctor of philosophy should be awarded in recognition of the theoretical and empirical richness of the dissertation.